

●今日の詩篇72篇にはイスラエルの民の渇きが歌われています。1節2節には鍵となる「裁き」(ミシュパート)と「恵の御業、正しく」と訳された(ツェダカー)という言葉が繰り返されています。「王は公正な裁きをなし、正義をその身に体現する者であって欲しい」という祈りがここにありません。ただこの祈りは、杓子定規に善と悪を図り、裁く事を願っているのではないのです。この「ミシュパートとツェダカー」という言葉が聖書の中で用いられる時には、神のいつくしみや憐れみをも含む言葉として用いられているのです。つまりこの言葉の根底にあるのは、苦しむ者の痛みへの共感と憐れみ、英語でいう「コンパッション」なのです。

●6節の「王が牧場に降る雨となり、地を潤す豊かな雨となりますように」という言葉は強力な軍事力や知恵や経験などではなく、深い哀れみと共感を持って民衆と共に涙し、汗を流して労苦するような指導者を渴望していた民衆の思いが込められているのでしょう。その意味でこの詩編はイエス様を預言する詩でもあるのです。イエス様は姦通の罪を犯した女性が連れてこられた時に、彼女を裁かず、深いあわれみと同情をもって彼女に話しかけました。ここに、ミシュパートとツェダカーを本当に体現した王の姿があるのです。

●ある時、教会の活動で一人の路上生活者の男性の方との出会い、彼に今一番臨んでいるものは何か？と尋ねた時に即座に彼は「コンパッションだ」と答えました。それはこの社会にあって誰もが切に求めているものだと感じ、私たちは「コンパッションミニストリー」を立ち上げ、活動を始めました。その働きは地味なものですが、そこに笑顔や支援の輪が広がっていったのです。

●私の住むサンノゼの極度に乾燥した大地は、一日や二日の雨では大地を潤すことはできません。しかし、その雨が一日、また一日と注がれていくうちに、茶色の山や丘は驚くほどに一面、綺麗な緑色に変わります。今日の詩編を記した詩人もイスラエルの土地のそのような雨を思い浮かべ、神の憐れみと共感、そして愛は必ずや社会に潤いを満たしていくのだということを信じていたのでしょう。なかなかすぐには潤わない乾いた心が、この社会に、また私たちの内にもあります。しかし、教会の歩みとは、それを本当に深く潤うことのできるイエスキリストの愛と憐れみ、共感の力を信じて歩む事です。そのような歩みを共に力強く続けてまいりましょう。